

宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称 およびその利用法 : I. 高木

内海, 泰弘
九州大学大学農学部附属演習林

村田, 育恵
九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻

椎葉, 康喜
九州大学大学農学部附属演習林

井上, 晋
九州大学大学農学部附属演習林

<https://doi.org/10.15017/15052>

出版情報 : 九州大学農学部演習林報告. 88, pp.45-56, 2007-03. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :



論文

宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称 およびその利用法 I. 高木*

内海泰弘**, 村田育恵***, 椎葉康喜**, 井上 晋**

抄 録

日本民俗学発祥の地とも呼ばれ、伝統的な植物民俗文化を維持している宮崎県椎葉村大河内地区において、生育する高木（針葉樹10種、広葉樹59種と6類）の伝統的な利用法とその方言について集落の複数の年長者から聞き取り調査を行い記録した。その結果、建築材として用いる場合は木材の強度、耐久性、加工性などの要件を組み合わせることで部材に応じた樹種の選択が行われていた。一方、器具材には材の重堅な樹種はその重堅さを、軽軟な樹種はその軽軟さを生かす利用が図られていた。また、ほだ木にはキノコとその発生する樹種との対応関係を把握した上で、ほだ木としての耐久性と利便性から状況に応じて多くの樹種を利用してきたことが明らかになった。

キーワード：椎葉，大河内，高木，方言，伝統的利用法

簡略表題：椎葉村大河内集落における植物方言および利用法 I

*Yasuhiro UTSUMI, Ikue MURATA, Yasuki SHIIBA, Susumu, INOUE:
Traditional name and usage of plant in Okawachi, Shiiba Village. I. Trees.

**九州大学大学農学部附属演習林

Kyushu University Forests, Kyushu University

***九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻

Department of Forest and Forest Products Sciences, Graduate school of
Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University

1. はじめに

ある集団における固有の文化〔人間が長年にわたって形成してきた慣習や振舞いの体系 (Wikipedia contributors, 2006)〕というものは年長者から年少者へ、その集団内で代々受け継がれてきたものを柱としている。しかし、現代においては情報や人の交流の速度が過去と比較して飛躍的に早まったため、小集団内で独自の文化を保持することが困難になってきている。九州大学農学部附属演習林宮崎演習林が所在する宮崎県東臼杵郡椎葉村大河内地区もそのような小集団の一つであり、2005年4月の時点での人口は104戸、300人である (松岡, 私信)。当地区の文献的記載は椎葉村内では最も古く、室町時代後期の1559年に大河内他の豪族が隣接する熊本県の人吉領主相良氏と湯前領主東氏の争いに参加し敗死したことが記録に残っている (椎葉村, 1994)。椎葉村は江戸時代になると人吉藩の管理するところとなり、大河内地区の中心地である本郷集落には庄屋、横目 (検察の役割を果たした) が置かれた。当地区はこのように歴史的には古くから人々が生活していたものの、山岳奥地に位置するため道路や電気などの生活基盤の整備が都市部と比較して遅れたことで、独自性の高い山村文化を保持し続けてきた。

この独自性に最初に目を向けたのが民俗学の祖とされる柳田國男である。1909年に出版された柳田の最初の著作である後狩詞記 (柳田, 1970) は、大河内地区の篤農家であった椎葉徳蔵氏保有の狩猟に関する巻物を、当時の椎葉村長だった中瀬淳氏が書き写したものと、同氏による狩猟民俗誌を元としている (牛島, 1993)。また、当地区では国指定無形重要民俗文化財の大河内神楽他6地区での神楽や村指定無形文化財の大河内臼太鼓、大藪臼太鼓といった民俗芸能が継承されてきており、大河内地区が長きにわたって独自の文化を維持してきたことを伺うことができる。

椎葉村における民俗文化の研究は柳田國男以降も断続的に行われており (椎葉村, 1994)、狩猟や建築、祭祀、生活全般に関して様々な報告がなされている (石原, 1961; 野間, 1970; 飯島と徳安, 2000)。また、椎葉村は九州山地に位置する山里であることから人々の生活における森林利用は緊密で、森林を構成する樹木を含めた植物に関する知識の蓄積が豊富である (斉藤と椎葉, 1995)。一方、椎葉村は九州で一番面積が広い村 (面積536.20km²) でもあり、1889年 (明治22年) の町村制施行までは「下福良、不土野、大河内、松尾」の4村に分かれ (椎葉村, 1994)、各地区固有の文化が維持されてきた。しかし、日本の多くの中山間地において同様であるが、人口の減少、都市部への流出が現在でも止むことがなく (椎葉村, 1994; 2006)、当地区における文化の継承者の絶対数も減少しつつある。

この様に口承による文化の伝達が十分になしえない現状があり、可及的速やかにこれまで蓄積されてきた森林に関する知識を記録に止めておかなければ、当地区固有の文化の一部が永久に消滅してしまう危険性がある。大河内地区の森林の概要については植物分類学者の初島 (1970) により「九州大学宮崎演習林の植物」としてすでに報告されている。この報告では当地区に生育する大部分の植物が記載されていると考えられるが、そこに生活する人々の植物利用法については述べられておらず、植物名方言に関する記載も完全ではない。少し長くなるが植物民俗学に多くの著作を残した倉田 (1969) の言を引用すると「植物の方言名に関する知識はその重要性にもかかわらず注意する人が少ないのは残念で

ある．．．方言名の多くは最近になって全く新たに名付けられたという物ではなく、長い歴史を持って里人達により数百年あるいはひよっとすると数千年も昔から伝えられてきたものであるから、方言名の研究により日本人古来の植物に対する見方、考え方、あるいは植物をいろいろ利用した生活を推察することも可能である」と述べている．現在進行形で消え去ろうとしている植物の方言とその伝統的な利用法を記録することは緊急の課題である．

そこで本研究では大河内地区に生育する植物、特に高木の伝統的な利用法とその方言について集落の複数の年長者から聞き取り調査を行い、当地区における伝統的な生活様式の一部を明らかにし、記載することを目的とした．

2. 調査地の概要と調査方法

九州山地のほぼ中央部に位置し、熊本県の五木・五家荘地域と並んで平家の落人伝説で知られる宮崎県東臼杵郡椎葉村大字大河内地区を調査対象区とした．大河内地区の面積は96.39km²（松岡，私信）で、主に日向灘に注ぐ一ツ瀬川と小丸川の上流域にあたり、耳川上流域の椎葉村下福良地区（村役場所在地）とは流域を異にしている．さらに文化・経済圏は、歴史的に熊本県の人吉・球磨地域に属しており、大河内地区は流域圏、行政圏、文化・経済圏の3つがそれぞれ異なる複雑な地域である．

大河内地区の地質は、西南日本外帯の九州四万十帯に属し、中生代白亜紀～新生代古第三期（1億3千万年～2千3百万年前）にかけて形成された四万十層群が基盤をなす．これらは砂岩・頁岩などの堆積岩類を主体とし、広域変成作用により千枚岩もしくは片状岩化しているものが多く、薄く層状に剥がれ風化しやすくもろい地質となっている．また、九州大学宮崎演習林庁舎（標高600m）における気象観測では、年平均気温13.3℃、暖かさの指数103.0m.d.、年降水量3472mm（いずれも1944～2005年の平均値）である．特に梅雨末期と台風時期には集中豪雨に見舞われることが多く、500mmを超える日雨量が数年毎に記録される．1954年にはこれまでの年最大降水量6417mmと最大日雨量725mmを観測している（井上ら，2006）．

大河内地区の標高は460m～1607mの間であり、垂直的気候帯では暖温帯上部から冷温帯に及ぶ．古くより焼畑、スギ・ヒノキ・クスギの造林、カヤ場の維持管理など強い人為的攪乱を受けてきたために、自然植生は津野岳や三方岳の高標高域一帯と、大河内神社社叢林に断片的に見られるのみである（初島，1970）．熊本県境に近い津野岳山系ではシナノキなどの日本の北方系要素の南限分布を形成する植生と九州中央山地要素の植生が、一ツ瀬川流域左岸の三方岳方面では四国から続くソハヤキ（襲速紀）要素と呼ばれる西南日本外帯の植生が強い植物相となっている（井上，1978；1983）．

標高700m～1000m付近には中間温帯林のモミ・ツガ林が広く分布し（初島，1970；井上，1998）、標高1000mより上部はブナースズタケ群集を代表とする冷温帯性落葉広葉樹林である．主要樹種はブナ、ミズナラ、ミズメなどの落葉広葉樹であり、常緑広葉樹は少ない．針葉樹ではモミ、ツガ、アカマツ、ヒメコマツが主な樹種で、コウヤマキが南限地帯として尾根筋に散生分布する（初島，1970；井上と初島，1978；井上，1983）．しかし、約20年前よりニホンジカの増加に伴い下層植生のスズタケが著しく減少し、木本類や草本

類に選択的な摂食圧が加えられることで森林の生態系が大きく変化しつつある（井上と小泉，1996；井上ら，2002；猿木ら，2004；大沢と朱宮，2005；小泉ら，2006）。

聞き取り調査は大河内地区で生を受け、幼少期から現在に至るまで当集落に居住されている年長者の中で、植物名とその利用法に詳しい72歳から78歳までの5名の方を対象に行った。2006年の4月から10月にかけて高木の大河内地区での呼称とその利用法についてそれぞれ1から3回調査を行い、得られたデータは当地区出身の椎葉と当地区にそれぞれ11年と4年、1年居住ないし滞在した井上と内海、村田とで検討を加え、複数の人から確証が得られた樹種を選抜し記載した。

3. 結果と考察

調査した高木69種と6類（針葉樹10種、広葉樹59種と6類）の学名、標準和名、大河内地区での呼称、用途等を表に示す。樹種の記述は分類学的にはAPG植物分類体系（Stevens, 2001）に従うべきであろうが、本報告では用途、呼称における比較の便を優先し、針葉樹と広葉樹それぞれで和名（類名）の五十音順に従った。和名、学名に関しては佐竹ら（1989a; 1989b）に準じた。なお、広葉樹のなかで呼称・用途での種間の区別が認められなかったものを類名として記した。

記載樹種が高木であるため、最も重要な利用形態は建築、造作材としての使用であった。中でも針葉樹は建築材として重用されてきた。柱にはスギ、ヒノキ、ツガ、モミが使われ、特にツガは材に狂いが少なく、当地区の森林に豊富に存在し、同様に蓄積の大きいモミと比べて耐久性が高く、割裂、乾燥が容易（貴島ら，1977）なことから賞揚されたと考えられる。一方、モミやスギは加工の容易さから天井板などに、ヒノキはその優れた耐久性から土台や縁板に利用されてきた。モミはその耐久性の低さを逆に長所として、棺材には必ず用いられた。アカマツは椎葉村の属する宮崎県が良材の産地として有名であり（畑，1940）、針葉樹材のうちでは重硬（木材工業，1966）であることを利用して梁や鴨居など構造部材として用いられたと考えられる。コウヤマキは水湿に対する耐久性の高さ（貴島ら，1977）を利用して桶や杭に、ヒメコマツは加工、割裂、乾燥が容易で狂いが少ない性質（貴島ら，1977）から障子の棧などに利用されている。以上のように建築材として様々な樹種をその材質特性に応じて利用していることがわかる。また、カヤについては有用材であるとの共通認識はあるものの、当地区では量が限られるため枯損木の利用にとどまる場合が多いようである。日向のカヤは古くから全国的に最優品として知られ（上原，1959）、基盤用材等での市場価値が高かったため、材の大部分は日常の用途には用いず地区外へ伐出されたのではないかと考える。

大河内地区ではアララギと呼ばれるイチイも全国的には器具材として利用され（農務省山林局，1912）、また仮種皮が非常に甘く、北国の子供達に親しまれ、アイヌの人々も食用にしてきた（福岡，1995）が、当地区では標高の高い奥山にしか生育しないため、積極的な利用は認められなかった。庭木としては挿し木で良く増えるが、挿し木から成長した個体は枝を横に伸ばすばかりであり樹高は高くならないという。このような現象はtopophysisと呼ばれ、他の針葉樹でも報告されており（Power et al., 1988）、挿し穂を採取する親木の部位でその後の成長様式が規定されてしまうと考えられる。

針葉樹材の建築、器具材以外の利用法として、アカマツの心材を用いた松明がある。アカマツの倒木の心材、特に節の部分は鱗節色を呈し油分に富み、時間が経過しても腐敗しない。この様な部位を大河内地区ではアカマツに限らずコウソンと呼ぶ。当地区に電気設備が整備されたのは1964年（昭和39年）以降であり、昭和の初めからは灯油ランプを夜間の照明に利用していたが、1957-8年（昭和32-3年）頃までは松明も併用し、アカマツのコウソンを日常的に山に取りに行った。鉛筆よりもやや太い程度に細かく割ったコウソンを藁で縛り、いろり端の松明を置く台〔当地区では「火明（ひあかし）」と呼称〕の上で燃やして明かりを取った。その煙で人も家も大分燻されたそうである。炉縁材としてはミズメやサクラ類、タブノキが用いられた。現在も盆には「しょうろうさん」の迎え火、送り火として松明が焚かれている。

広葉樹材の中では材が重硬で耐久性が高いクリやケヤキ、サクラ類（木材工業、1966）が柱材として、大径木になるケヤキ、ミズメ、サクラ類、カゴノキ、タブノキが板材として使われている。クリはアカマツと同様コウソンが残り、耐久性が高く、割断が容易なため板瓦に用いられ、大河内地区の小学校舎（1954年、台風水害のため流出）の屋根もクリの板瓦で葺かれていた。なお、一般の民家はススキ、スギの板瓦、スギの樹皮で屋根が葺かれることが多かったようである。

ヒメシャラは材が強靱、堅固である（貴島ら、1977）ことから餅つきの杵に最良であるとされ、同じツバキ科のヤブツバキも遜色がないとされている。対する臼にはケヤキが狂いが少なく大きな材が取れるため重用される。一方、材が軽軟で切削性が良い（貴島ら、1977）ことを利用してキリは下駄や箆筒材に、ネムノキは下駄や、器具材、弁当箱（大河内地区では「めんば」と呼称）に、ホオノキは下駄やマナイタ、障子の棧などに用いられた。なかでもホオノキはその切削性が非常に良好なことから当地区の小学校の木版画用材として必ず用いられたそうである。

椎葉村での木炭の生産は1935年（昭和10年）頃には宮崎県で最大の生産量を誇るようになったが、昭和30年（1955年）代以降は生産量が急激に落ち込み、昭和50年（1975年）代には生産はほとんど行われなくなった（椎葉村、1994）。当地区で炭材に適する高木種はカタギと呼ばれるカシ類、ヤブツバキ、リョウブ、クヌギ、ミズナラ、コナラなどで、柔らかいシイ類などは適さない。薪材には広葉樹全般が広く使われ、針葉樹はあまり使われなかった。しかし、広葉樹の中でもアワブキやネムノキ、フサザクラは生木では燃えにくいため使用されず、ヤマウルシは燃焼時に材がはじけるので嫌われた。薪材にも炭材と同様にカタギの類が燃焼時間が長い（当地区では「出がある」と呼称）、好んで用いられた。特殊な利用としてヤブツバキの長い枝を水に浸けて、白炭を作る際の火掻き棒として使用した。これはヤブツバキが難燃性で（農商務省山林局、1912）耐久性があり、強靱かつ堅硬（貴島ら、1977）な性質を利用したものである。

椎葉村ではシイタケ栽培が江戸時代からはじまり、明治以降盛んに行われている（椎葉村、1994）。そのためシイタケを栽培するほだ木（当地区では「なばぎ」と呼称）として利用される樹種が複数存在する。最もほだ木に良いとされるのはクヌギであり、ほだ木としての耐久性が高く、発生するシイタケの品質も良い。ただしクヌギは当地区には自生しないため、人工造林に頼っており、自生する樹種としては同じコナラ属のミズナラとコナラが重用されてきた。また、当地区に自生するシデ類（アカシデ、イヌシデ、クマシデ）も

耐久性は劣るもののシイタケが良く生え、中でもアカシデが最も品質の良いシイタケが採れるとされている。種駒の接種による人工栽培が行われる以前は、伐採したほだ木に鉋目を入れて天然に在する菌を侵入させることで栽培が行われていた。この鉋目を入れる方法でブナからはナメコが、エノキには立木に斧で切れ込みを入れることでエノキタケが、アカメガシワの枯れ木からはキクラゲやナメコが取れた。

木部以外の利用としては、ホオノキの葉がにぎり飯を包むために、アカメガシワの葉が盆に米の団子を仏前に供える際に、ユズリハの葉が正月の飾りとしてそれぞれ利用されてきた。ホオノキの葉で飯を包む習慣は本州でも報告されている（宇都宮，1982）。キハダの内樹皮は椎葉村内で胃薬として利用されており（斉藤と椎葉，1995）、オオバクという名で日本薬局方に登録されている。キハダ内樹皮含有成分のベルベリンには抗菌作用があり、胃潰瘍などの抑制作用がある（日本薬剤学会，2004）。この内樹皮を取るためには7、8月頃に伐採し、樹幹をある程度の長さに切った後、竹べらで樹皮を剥ぎ取り、外樹皮をそぎ落とした後で10日ほど天日干して完成品となる。煎じて飲むのが味は非常に苦い。

大河内地区ではイチイはアララギと称し、イチイの呼び名はイチイガシを意味する。同様にカシワはブナ科コナラ属のカシワではなく、トウダイグサ科アカメガシワ属のアカメガシワの意である。いずれの方言も九州南部では広く用いられており（農務省山林局，1916；倉田，1963；八坂書房，2001）、お盆にアカメガシワの葉に団子を包んで仏前に供える風習が鹿児島県出水市でも報告されている（倉田，1974）。伊勢神宮の祭典で神饌を供える際の数物もアカメガシワであり（足田，1985）、神仏ともに利用されていることになる。同じクスノキ科で常緑性のカゴノキをフユコガ、落葉性のカナクギノキをナツコガと称する。九州ではカナクギノキとカゴノキをそれぞれコガと呼ぶ地方があり（倉田，1969）、熊本県球磨村ではカゴノキをホシコガ、カナクギノキをナツコガと呼んでいる（辻木ら，1979）。また、静岡や愛知ではカゴノキとカナクギノキをそれぞれフユカ（ガ）ノコとナツカ（ガ）ノコと呼びならわしている（倉田，1963）。分類学的に近縁で木の生活史の違いから冬と夏の名が付いたと思われるが、当地区に限らず昔の人々は木の性質をよく見分けていたということであろう。同様にミズキ科のミズキをヒエミズシ、クマノミズキをアワミズシと呼ぶのも、ヒエを蒔く適期である4月末にミズキの花が咲き、アワを蒔く5月中旬にクマノミズキの花が咲くことからこの名が付いている。椎葉村では伝統的に焼き畑が行われ、アワやヒエが日常的に栽培されてきた（斉藤と椎葉，1995）。生物季節を利用して日々の生活が営まれてきたことを伺い知ることができる。またクマノミズキとミズキは材色からそれぞれアカミズシ、シロミズシとも呼称され、同様の区分が熊本県球磨村でも報告されている（辻木ら，1979）。タブノキは個体間の材色の違いによりコウ（紅）タブとシラ（白）タブに区別されている。

大河内地区の方言として初島（1970）はハリモミにはモミナロウないしサワラ、アサダにはアクマキ、コシアブラにはホットロを報告しているが、本研究では上記の樹種の方言名の回答を得ることが出来なかった。これらの樹種はいずれも高標高地に生育している。焼き畑が盛んに行われていた時代には、主食であったヒエの適地が標高の高い場所であったため、往時の人々は高標高地に焼き畑を開き、周辺の樹種をよく知っていたと思われる。しかし、通常の農業に生業が転換し、高標高地の樹種との接触が少なくなる過程でその方言が失われていった可能性がある。イタヤカエデ、チドリノキ、コガノキ、ウラジロガシ、

コナラ、タムシバ、ハルニレ、ミズキ、ヤマトアオダモは本調査ではそれぞれケイジノキ、タニシバ、フユコガ、シラカシ、ハウサノキ、コブシギ、ネレノキ、ヒエミズシ、トネルであり、初島（1970）ではそれぞれケイジカエデ、タニガシ、コガノキ、ウラジロガシ、ハウサシュ、モクレン、ニレ、ミズシ、ホンドネルとされている。初島（1970）の報告から36年が経過しており、文字で固定されることの少ない方言は時間経過とともに変化していくことを示しているのかもしれない。大河内地区における呼称の初記載としてはそれぞれアオハダがソヨゴ、アカメガシワがカシワ、キハダがキワダ、ユズリハがツルノハがある。アオハダの方言として八坂書房（2001）で全国に101語報告されているなかにソヨゴの呼称はない。限定された地域で呼称されていると考えられるが、同属のソヨゴの名を用いているのは当地区の人々が木をよく知っていた証拠であろう。なお、ソヨゴは当地区ではフコナナメないしナナメギと称する。

同じ椎葉村の不土野地区での報告（椎葉と斉藤，1995）と比較すると、イタヤカエデ、エドヒガン、カゴノキ、クマノミズキ、ミズキ、フサザクラが本調査ではそれぞれケイジノキ、ヒガンザクラ、ナツコガ、アワミズシ、ヒエミズシ、タニアサであるのに対して斉藤と椎葉（1995）ではそれぞれケイジモミジ、カバザクラ、コガノキ、カタミズシ、タナミズシ、アメフラシとなっており、現在の行政区域が同じ比較的狭い範囲でも、方言に地域差が存在することが示唆された。

本研究でいろいろな方にお話を伺って感じたことは「適材適所」の高木利用が伝統的に図られてきたということである。家を一軒建てる場合も、木材の強度、耐久性、加工性など、様々の要件を組み合わせ、入手できる範囲で最良の樹種を選択して用いている。また、器具材としても材が重堅な樹種はその重堅さを、軽軟な樹種はその軽軟さを生かして種々の用途に用いられている。加えてキノコとその発生する樹種との対応関係やほだ木としての優劣、薪炭材利用における工夫など、多種の樹木を識別し利用してきたことが伺える。本研究で記載した一樹種一樹種が、それほど遠くない昔にこの山村の生活の様々な場所で重要な役割を担っていたことに思いを巡らし、本報告が大河内地区の伝統的文化を次世代に引き継ぐ一助になることを願う。なお、低木や草本植物の方言と伝統的利用法については次の機会に言及したい。

謝辞

調査にあたっては大河内地区在住の椎葉治美、松子夫妻、藤岡盛重、ミヤ子夫妻、椎葉司、君代夫妻に多大な御教示、御示唆をいただいた。椎葉村ならびに大河内地区の統計資料については椎葉村企画観光課の松岡正社氏に御協力いただいた。文献資料については東京大学の大沢雅彦教授に御教授をいただいた。九州大学の田代直明氏、壁村勇二氏、山崎舞子氏には調査に御助力いただいた。以上の各氏に心より御礼申し上げる。

引用文献

- 足田輝一 (1985) : 木の文化誌, 朝日新聞社, 東京, p. 503
- 福岡イト子 (1995) : アイヌ植物誌, 草風館, 東京, p. 241
- 畑 泰治 (1940) : 木材の知識, 木材國書刊行會, 大阪, p. 263
- 初島住彦 (1970) : 九州大学宮崎演習林の植物. 九州大学農学部演習林報告: 44 別冊
- 飯島秀治, 徳安裕子 (2000) : 樽尾神楽. 関一敏, 竹沢尚一郎編, 九州の祭り第2巻 椎葉の祭り, 九州大学文学部人間科学科比較宗教学研究室, 福岡, pp.12-111
- 井上 晋, 初島住彦 (1978) : 植物分布上より見た九州大学宮崎演習林の植生. 日本林学会九州支部研究論文集 31 : 173-174
- 井上 晋 (1978) : 九州大学宮崎演習林津野岳団地の植生について. 鹿児島植物 4 : 26-32
- 井上 晋 (1983) : 景観造成のための緑地保全に関する研究. 九州大学農学部演習林報告 53 : 1-97
- 井上 晋 (1998) : 椎葉の自然—森林—. 文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 16: 1-4.
- 井上 晋, 小泉透 (1996) : 九大宮崎演習林におけるシカが及ぼす影響について. 日林九支研論集 50 : 105-106
- 井上 晋, 熊谷朝臣, 内海泰弘, 馬淵哲也 (2006) : 九州大学農学部附属演習林宮崎演習林 第6次森林管理計画書, 宮崎演習林第6次森林管理計画策定委員会, 椎葉, p. 58
- 井上 晋, 内海泰弘, 大槻恭一, 岡野哲郎, 古賀信也, 田代直明, 中井武司 (2002) : 九州大学の森と樹木, 九州大学農学部附属演習林, 福岡, p. 159
- 石原憲治 (1961) : 五家荘と椎葉. 宮本常一編, 秘境. 有紀書房, 東京, pp. 219-226
- 小泉 透, 矢部恒明, 井上晋 (2006) : ニホンジカの採食がスズタケの動態に及ぼす影響. 九州森林研究 59 : 90-93
- 貴島恒夫, 岡本省吾, 林昭三 (1977) : 原色木材大図鑑, 保育社, 大阪, p. 204
- 倉田 悟 (1963) : 日本主要樹木名方言集, 地球出版, 東京, p. 291
- 倉田 悟 (1969) : 植物と民俗, 地球出版, 東京, p. 328
- 倉田 悟 (1974) : 樹木と方言, 地球社, 東京, p. 150
- 木材工業 (1966) : 日本の木材, 日本木材加工技術協会, 東京, p. 101
- 日本薬剤学会 (2004) : 薬学生・薬剤師のための知っておきたい生薬100, 東京科学同人, 東京, p. 172
- 野間吉男 (1970) : 椎葉の山民, 慶友社, 東京, p. 196
- 農商務省山林局 (1912) : 木材ノ工藝的利用, 大日本山林會, 東京, p. 1308
- 農務省山林局 (1916) : 日本樹木名方言集, 大日本山林會, 東京, p. 345
- 大沢雅彦, 朱宮文晴 (2005) : 九州中央山地三方岳の植生分布とシカ個体群の影響. 大沢雅彦編, 地球温暖化による植生帯移動と生態系崩壊に対する保全手法の開発, 住友財団環境研究助成報告書, 東京大学, 東京, pp. 46-63
- Power, A. B. Dodd, R. S., Libby, W. J.(1988): Cyclophysis and topophysis in coast redwood stecklings. I. Rooting and nursery performance. *Silvae Genetica* 37: 8-14

- 斉藤政美, 椎葉クニ子 (1995): おばあさんの植物図鑑, 葦書房, 福岡, pp. 219
- 猿木重文, 井上 晋, 椎葉康喜, 長澤久視, 大崎 繁, 久保田勝義 (2004): 九州大学宮崎演習林においてキュウシュウジカの摂食被害を受けたスズタケ群落の分布と生育状況. 2003年調査結果. 九州大学農学部演習林報告 **85**: 47-54
- 佐竹義輔, 原 寛, 巨理俊次, 富成忠夫 (1989): 日本の野生植物 木本 I, 平凡社, 東京, p. 321
- 佐竹義輔, 原 寛, 巨理俊次, 富成忠夫 (1989): 日本の野生植物 木本 II, 平凡社, 東京, p. 305
- 椎葉村 (1994): 椎葉村史, 椎葉村, 椎葉, p. 1107
- 椎葉村 (2006): 椎葉村ホームページ. 統計資料. 人口状況. <http://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/cms/index.php?blogid=6&catid=114>
- Stevens, P. F. (2001 onwards): Angiosperm Phylogeny Website. Version 7, May 2006. <http://www.mobot.org/MOBOT/research/APweb/>
- 上原敬二 (1959): 樹木大図説 I, 有明書房, 東京, p. 1300
- 牛島盛光 (1993): 日本民俗学の源流, 柳田国男と椎葉村. 岩崎美術社, 東京, p. 212
- 宇都宮貞子 (1982): 植物と民俗, 岩崎美術社, 東京, p. 285
- 汰木達郎・井上晋・薛孝夫 (1979): 球磨村の植物, 球磨村森林総合調査研究会, p. 133
- Wikipedia contributors (2006): 文化. Wikipedia, <http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%96%87%E5%8C%96&oldid=8468575>
- 柳田國男 (1970): 後狩詞記. 定本柳田國男集第27卷. 筑摩書房, 東京, pp. 1-39
- 八坂書房 (2001): 日本植物方言集成, 八坂書房, 東京, p. 946

Summary

Shiiba village has been believed to be the birthplace of Japanese folklore. The traditional name and usage of 69 tree species growing in Okawachi Settlement, Shiiba Village were described based on the hearing investigation from the learned elders of the settlement. Construction wood was chosen mainly from coniferous species in view of the strength, endurance and workability. Furniture and instrument wood were selected from the degree of hardness and density in accordance with the purpose of usage. The tree for mushroom cultivation was determined depending on the compatibility with the fungi and durability of the mushroom bed.

Key words: Shiiba, Okawachi, tree, dialect, traditional usage

表 大河内地区における高木の方言と用途

Table. The traditional name and usage of trees in Olawachi

学名 Species	類名 Group	和名 Japanese name	方言 Traditional name	用途等 Usage
針葉樹				
<i>Pinus densiflora</i>		アカマツ	マツ	材は梁、欄干、縁板に用いる。柱には虫が付くため不適。倒木の心材（特に節の部分）は油分が多いので松明にした。
<i>Taxus cuspidata</i>		イチイ	アララギ	
<i>Torreya nucifera</i>		カヤマキ	カヤマキ	子供が実を食用や片端を削って笛にした。枯損木を杭材に用いた。
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	マキ	材は耐久性が高く桶、壁板、杭、小屋、家の柱に用いたが、汚れやすかった。
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	スギ	材は柱、垂木、天井板、引き出しの裏板、桶、土板に用いる。軽くて手触りが柔らかいので織の柄として貴重。
<i>Tsuga sieboldii</i>		ツガ	トガ	材は狂いが少なく、昔は柱材に一番多く使われた。
<i>Chamaecyparis obtusa</i>		ヒノキ	ヒノキ	材質に優れ、柱、土台、縁板などに用いる。成長は遅い。
<i>Pinus parviflora</i>		ヒメコマツ	ゴヨウ	材は狂いが少なく障子の棧、雨戸に用いる。
<i>Picea polita</i>		ハリモミ	なし	
<i>Abies firma</i>		モミ	モミ	材は天井板、柱、棺材に用いる。
広葉樹				
<i>Ilex macropoda</i>		アオハダ	ソヨゴ	
<i>Mallotus japonicus</i>		アカメガシワ	カシワ	キクラゲ、ナメコが良く生えるほだ木になる。お盆に米で作った団子を葉で包み、湯がいたものを仏前に供える。
<i>Ostrya japonica</i>		アサダ	なし	
<i>Meliosma myriantha</i>		アワブキ	ウシブテ、ヤマビワ	生木は難燃性で木口から泡が出る。
<i>Idesia polycarpa</i>		イヌギリ	イヌギリ	材は軽軟で、太鼓の胴に用いる。
<i>Fagus japonica</i>		イヌブナ	なし	
<i>Celtis jessoensis</i>		エゾエノキ	エノキ	立木に斧で切れ込みを入れ、エノキタケを生やして取った。
	カエデ類	カエデ類	カエデ	大きな木をテーブル材とした。
<i>Acer mono var. marmoratum f. dissectum</i>	カエデ類	イタヤカエデ	ケイジノキ	
<i>Acer ruginerve</i>	カエデ類	ウリハダカエデカエデ、アオギリ		
<i>Acer carpiniifolium</i>	カエデ類	チドリノキ	タニシバ	
<i>Diospyros kaki</i>		カキノキ	カキノキ	実を食用。渋柿は灰と灰を入れた約40℃の湯に浸け、その後冷却と加温を繰り返して渋を抜いた。
<i>Litsea coreana</i>		カゴノキ	フユコガ	材色は桃色で下駄の歯や、大きな材はテーブルに用いた。
	カシ類	カシ類	カシ	アカガシ、シラカシ以外はまとめてカシと呼称することが多い。炭材、薪材に最適。
<i>Quercus acuta</i>	カシ類	アカガシ	アカガシ	耐摩耗性が大きく木馬材に最適。
<i>Quercus glauca</i>	カシ類	アラカシ	ハトガシ	カシ類の中では比較的柔らかい。
<i>Quercus gilva</i>	カシ類	イチイガシ	イチイ	
<i>Quercus salicina</i>	カシ類	ウラジロガシ	シラカシ	割断が比較的容易で靱性が高く、柄木に用いる。
<i>Quercus myrsinaefolia</i>	カシ類	シラカシ	アマガシ	
<i>Quercus sessilifolia</i>	カシ類	ツクバネガシ	カシ	
<i>Cercidiphyllum japonicum</i>		カツラ	カツラ	材を製台に用いた。
<i>Lindera erythrocarpa</i>		カナクギノキ	ナツコガ	
<i>Phellodendron amurense</i>		キハダ	キワダ	樹皮は健胃薬になる。
<i>Paulownia tomentosa</i>		キリ	キリ	材は軽軟で家具、下駄材に用いる。
<i>Quercus acutissima</i>		クヌギ	クヌギ	ほだ木の耐用年数が長く、良質のシイタケが採れる。木の成長は早く成期は14-15年から。炭材に適する
<i>Suida macrophylla</i>		クマノミズキ	アワミズシ	材色赤くアカミズシとも呼ばれる。実はイノシシの餌になり、アワを降く5月中旬に開花。

学名 Species	類名 Group	和名 Japanese name	方言 Traditional name	用途等 Usage
<i>Castanea crenata</i>		クリ	クリ	材は耐久性、割断性が高く、枕木や土台、柱、板瓦（そぎ）、ほだ木、吊橋の渡し板に用いた。
<i>Zelkova serrata</i>		ケヤキ	ケヤキ	材質優れ狂いや割れが少なく、臼材として最良、柱材や仏壇、家具材、電柱の腕木に用いた。
<i>Acanthopanax scitadophylloides</i>		コシアブラ	なし	
<i>Quercus serrata</i>		コナラ	ホウサノキ	用途はミズナラに同じ。
	サクラ類	サクラ類	サクラ	
<i>Prunus buergeriana</i>	サクラ類	イヌザクラ	イヌザクラ	
<i>Prunus grayana</i>	サクラ類	ウウミズザクラ	なし	
<i>Prunus pendula f. ascendens</i>	サクラ類	エドヒガン	ヒガンザクラ	ヤマザクラと用途は同じ、大きな材が取れ、狂いが少ないので重用された。
<i>Prunus jamasakura</i>	サクラ類	ヤマザクラ	カバザクラ、カバノキ	材は赤味があり、柱、縁板、いろりの棧に用いる。
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	グルミ	材は下駄材に用いた。
	シイ類	シイ類	シイ	当地区にはスタジイ、ツブラジイ、マテバシイがある。材はほだ木、実は食用（そのまま美味）、薪材、炭材には不適。
	シデ類	シデ類	ソヤ	シイタケ種駒による人工栽培を行う前は、ほだ木として伐倒後、元口側を少し地面から浮かせて、鉋目を入れてシイタケを発生させた。
<i>Carpinus laxiflora</i>	シデ類	アカシデ	マソヤ	ほだ木としてシデ類では1番優れる。シイタク生産が可能になるまでの期間は短い。
<i>Carpinus tschonoskii</i>	シデ類	イヌシデ	アオソヤ	ほだ木としてシデ類では2番目に優れる。
<i>Carpinus japonica</i>	シデ類	クマシデ	タケソヤ	ほだ木としてシデ類では3番目で、あまり用いない。
<i>Fraxinus platypoda</i>		シオジ	シオジ	材を踏板に用いた。
<i>Diospyros kaki var. slyvestris</i>		シナノガキ	ヤマガキ	子供は実を食用とした。
	シナノキ類	シナノキ類	ヘラ	当地区にはシナノキとヘラノキがある。樹皮から糞、糞を作った。
<i>Ilex pedunculosa</i>		ソヨゴ	ナナメギ、フユナナメ	
<i>Machilus thunbergii</i>		タブノキ	タブノキ	材が赤色のものをコウタブ、材が白色のものをシラタブと呼ぶ。材は縁板などに利用し、大きな木はテール材に用いた。
<i>Magnolia salicifolia</i>		タムシバ	コブシギ	
<i>Ilex latifolia</i>		タラヨウ	ノコギリノキ	
<i>Stewartia pseudo-camellia</i>		ナツツバキ	なし	
<i>Picrasma quassioides</i>		ニガキ	なし	
<i>Albizia julibrissin</i>		ネムノキ	ネムノキ、コウカノキ	材は割断、切削性がよく下駄本体、弁当箱、器具材に用いる。生木は難燃性。
<i>Kalopanax pictus</i>		ハリギリ	ダラ	若芽を食用とする。
<i>Ulmus davidiana var. japonica</i>		ハルニレ	ネレノキ	材は狂いが大きい。
<i>Stewartia monadelphica</i>		ヒメシャラ	アカギ	枿材としては最良。
<i>Euptelea polyandra</i>		フサザクラ	タニアサ	生木は難燃性。
<i>Fagus crenata</i>		ブナ	ブナ	ナメコのほだ木としては最良。
<i>Magnolia obovata</i>		ホオノキ	フウ、フウノキ	材は下駄の歯、まな板、障子の棧、彫刻材に用いる。葉は糞り飯を包んだ。
<i>Fraxinus sieboldiana</i>		マルバアオダモ	アオドネリ	用途はヤマアオダモに同じ。材質はやや劣る。
<i>Swida controversa</i>		ミズキ	ヒエミズシ	材色からシロミズシとも呼ぶ。ヒエを暮く4月末に開花。
<i>Quercus crispula</i>		ミズナラ	ズウダノキ	ほだ木の耐久性は高いがシイタケの品質はクスギに劣る。炭材に適する。
<i>Betula grossa</i>		ミズメ	モウカザクラ	材質が優れ、厚物の板材が取れる。
<i>Camellia japonica</i>		ヤブツバキ	ツバキ	枿材（ヒメシャラが一番だが逢色ない）、独棄、炭焼き時の火掻き棒（非常に燃えにくく、水に浸しながら使用）とした。
<i>Fraxinus longicuspis</i>		ヤマアオダモ	トネル	材はハット材として、昭和30年代まで出荷していた。
<i>Cladrastis sikokiana</i>		ユクノキ	シロエンジュ	材は枕木とした。
<i>Daphniphyllum macropodum</i>		ユズリハ	ツルノハ、ユズリハ	葉を正月飾りに用いる。